

## 論文

日本語と中国語の助動詞の対照研究  
—「タイ」と“想”，“要”，“愿意”，“肯”を中心に—

楊 彩 虹\*

## 要旨

本研究では、日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”を比較した。まず、中国語の四つの助動詞の相違点を意味的な視点と構文的な視点からを論じた。意味的な視点では，“要”は“想”より願望が強い。“愿意”と“肯”とは何か前提があり，それについて主体の願望，意志を表す。願望の対象がマイナスなものであってもよい。また，“愿意”も“肯”も相手の提案に承諾する・しないといった「選択意志」を表す。

構文的な視点では，以下の違いについて検討した。①“想”と“愿意”は幅・度合い・スケールを帯びており，終端性・限界を持たないため，“很”などの副詞を付加することができる。一方，“要”と“肯”は幅・度合い・スケールを帯びておらず，終端性・限界を持つものなので，これらの程度副詞と共に起することができない。②“愿意去北京”，“肯去北京”は状態（静的事象）であるため，否定に“不”しか用いられない。一方，“想去北京”，“要去北京”は動的事象であるため，基準時以後の出来事の場合は，“不”を用いるが，基準時以前のことを表すときは“没”で否定する。③“愿意”の後に主述構造を置くことができるが，“想”，“要”，“肯”はできない。“愿意”は出来事の外部で願望を表すことができるが，“想”，“要”，“肯”は出来事の内部の願望しか表せないためと考えられる。④本研究で調査した“肯”のデータの中で，否定文は72%も占めている。

最後に人称における日本語の「タイ」と中国語の“想”の文を対照させた。中国語では一人称と三人称は同じ構文が使われるが，日本語では三人称の場合は「彼は北京に行きたい」は成立せず，「彼は北京に行きたがっています」で表す。この場合も，日本語の「主観的把握」を好む傾向が見られ，中国語では「客観的把握」が好まれるからだと説明できる。

## キーワード

日中対照 助動詞 タイ 想 要 愿意 肯

\* 神戸山手大学 非常勤講師

## 目 次

- 第 1 章 初めに
- 第 2 章 先行研究
- 第 3 章 日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”
  - 第 1 節 意味的な視点から
  - 第 2 節 構文的な視点から
  - 第 3 節 日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”
- 第 4 章 まとめ

## 第 1 章 初めに

日本語の「タイ」に対応する中国語は，“想”，“要”，“愿意”，“肯”などが挙げられる。

(1) a. 我困了，想睡觉。

(眠くなったから、寝たいです。)

b. 我困了，要睡觉。

(眠くなったから、寝たいです。)

c. ? 我困了，愿意睡觉。

(眠くなったから、寝たいです。)

d. ? 我困了，肯睡觉。

(眠くなったから、寝たいです。)

しかし、上記の例文 (1) のように，“想”，“要”は成立するが，“愿意”，“肯”に変えると不自然になる。

(2) a. 他很想去北京。

(彼は北京に行きたいです。)

b. \*他很要去北京。

(彼は北京に行きたいです。)

c. 他很愿意去北京。

(彼は北京に行きたいです。)

d. \*他很肯去北京。

(彼は北京に行きたいです。)

また、(2) のように，“想”，“愿意”は副詞の“很”で修飾することができるが，“要”，“肯”はできない。

このように，“想”，“要”，“愿意”，“肯”の用法は様々な違いが見られる。中国語教育においても、これらの助動詞の使い分けが難しいようだ。本研究では、この四つの助動詞の構文

的、意味的な違いを明らかにし、その原因を探りたい。また、これを明らかにしたうえで、日本語と対照させる。

## 第2章 先行研究

小学館『日中辞典』（第3版）で次のように記述している。

“想”：…したい．希望する．…したいと思う．動詞の前に用いる．副詞の修飾を受けることができる．（日中辞典：1713）

“要”：《意志を表す》…したい；…するつもりだ．（日中辞典：1829）

“愿意”：…したいと思う．否定には“不”を用い，“没”は用いない．“～不～”は“愿不～”とすることもできる．（日中辞典：1944）

“肯”：すすんで…（する）．喜んで…（する）；承知の上で…（する）．（日中辞典：865）

これらの説明でそれぞれの意味は分かるが、四つの助動詞の違いについては触れていない。教科書にも、“要”は“想”より願望が強いという記述に留まっており、この四つの助動詞を取り上げる文法書と先行研究も少ない。

劉ほか著片山・相原訳（1991）『現代中国語文法総覧』では、この四つの助動詞について次のように述べている。

“想”：「助動詞としての“想”は『願望』や『つもり』を表す。」（劉ほか著片山ほか訳 1991：153）

“要”：「あることをしようとする願望があることを表す。」（劉ほか著片山ほか訳 1991：152）  
「否定は“不要”ではなく，“不想”，“不打算”を用いる。」（劉ほか著片山ほか訳 1991：152）

“愿意”：「主体の願望を表す。『喜んで～する』という意味がある。」（劉ほか著片山ほか訳 1991：154）

“肯”：「1 主体の願望を表す。『一定の努力をもってある困難を克服する』という意味を含む場合がある。」（劉ほか著片山他訳 1991：154）

「2 有利な事柄や条件を独占しようとすることを表す。平叙文においては多くは否定形式で用いられ、『自分で有利な事柄や条件を独占せず他人に譲ろうとする』ことを表す。」（劉ほか著片山他訳 1991：154）

「3 他人の要求を受け入れることを表す。」（劉ほか著片山他訳 1991：155）

荒岡（1995）では、「“愿意”は『進んで…する』『喜んで…する』という意味を持ち，“想”より一層強く『…したい』という気持ちを表している。」（荒岡 1995：184）と述べている。

一方、王（2010）では、それを否定し，“愿意”は「相手の許可、同意を表す」としている。

また、「能願動詞としての“想”と“愿意”の根本的な違いは、“想”の場合は、主体が思考活動によって自らの希望や願望を表すのに対し、“愿意”の場合は、主体がある選択に対し、ある意思表示を表すことである。」（王 2010：45）と指摘している。

このように、助動詞“想”，“要”，“愿意”，“肯”について研究されてはいるものの、意味的な指摘に留まっていて、十分に論じられていない。また、構文的な違いについて、あまり触れていない。

### 第 3 章 日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”

#### 第 1 節 意味的な視点から

##### (3) a. 我想去北京。

（北京に行きたいです。）

##### b. 我要去北京。

（北京に行きたいです。）

先行研究で指摘されたように，“想”と“要”は心からしようとしていること、つまり主体の自らの願望を表す。両者の違いは，“要”は“想”より願望が強いという点にある。次の文からその違いが見られる。

##### (4) a. ? 我一定 / 无论如何也想去北京。

（私は必ず / どうしても北京に行きたいです。）

##### b. 我一定 / 无论如何也要去北京。

（私は必ず / どうしても北京に行きたいです。）

(4b) のように，“要”は程度の高い副詞“一定 / 无论如何”と共起できるが，(4a) の“想”は共起できない。

##### (5) 我想（ / \*要）帮她的忙，可是我无能为力。（相原主編 2015：630）

（彼女を助けたいが，力に余ります）（相原主編 2015：630）

また，相原主編（2015）で指摘したように，動作主の意思が明らかに願望にとどまり，行動または実現する可能性がない場合は，“想”しか使えず，“要”は使えない。この言語現象も“要”は“想”より願望が強いという説の裏付けになる。

次は“愿意”と“肯”を見てみる。

##### (6) 说起她和丈夫的婚姻，她当初并不是太乐意。她嫌丈夫的个头太矮，弟兄们太多，家里太穷。可丈夫托媒人一次次找她，说一定要让家里富起来，保证一辈子对她好。还说，她如果不愿意嫁给他，他就不想活了。（八月十五月儿圆）

（彼女と夫の結婚と言えは，当初は喜んで結婚しようと思わなかった。夫は背がひくく，兄弟が多

くて、家が貧しいことが気に入らなかった。しかし、夫は仲人さんに何回も来てもらって、必ず家を裕福にさせて、一生大事にすると言ったのだ。そして、もし彼女が結婚してくれなかったら、もう生きていたくないと言った。）

- (7) 这样的角色对他来说是新鲜的，有挑战性的，也许正因为这样，他才愿意去尝试一下。  
(在澡堂)

(このような役は彼にとっては新鮮でチャレンジです。だからこそ、やってみようと思ったかもしれませんが。)

(6) では、彼には結婚相手として、多くのマイナス要素があるが、それでも結婚したいという時に“愿意”を用いている。(7) では、彼にとっては難しい役であって、チャレンジ的だが、それでもやってみみたい時に“愿意”を用いている。“愿意”は何か前提があり、それについての主体の願望，意志を表す。願望の対象がマイナスなものであってもよい。障害を乗り越えた主体の願望を表す。

- (8) 顾荧荧笑了：“也好啊，你的脾气从来都是处乱不惊。其实，我找你是有事情的，我所在的基金会在城市北边的郊区搞了一个‘流浪者之家’，专门资助那些到北京漂着的年轻人的，你来帮帮我，怎么样？”

任菁菁很高兴：“好啊，我当然愿意了。在澳大利亚，我就经常在教会帮忙呢。”（流浪者之家）

(顧荧荧は笑った。「それもいいですね。任さんは昔から動じない性格ですよ。実は、用事があって訪ねてきました。私の所属している財団は、街の北の郊外で『流れ者の家』をやっていて、北京に上陸に来る若者を助けているんです。手伝ってくれますか。どうですか。」

任菁菁は喜んで「いいですよ。もちろん喜んで。オーストラリアでもよく教会でお手伝いをしていました。」と言った。)

また、(8) のように、相手に意向を聞かれた時に承諾の意志を表す。このような言語現象について、石井 (2016) では、“愿意” の性質を「選択意志」としている。

次は“肯”を見てみる。

- (9) 我让崔大林卸了担子，把箩筐吊在马上，但崔大林说他不累，非让我和老大骑马。老大胆子小，不肯骑。(一坛猪油)

(私は崔大林に、荷物を降ろして、かごを馬に乗せるようにと言いました。しかし、崔大林は疲れていないと言って、どうしても私と長男を馬に乗せようとしてしました。長男は肝が小さいから、乗ろうとしませんでした。)

- (10) 店主见孩子尿了客人的身了，不好意思，一再道歉，虽然她已经把整钱换成了零钱，但执意不肯收明瓦的钱，从兜里另翻出一张五十的整钱，连同皮碗一同递给他，说：“这孩子真是的，怎么偏偏往客人身上尿？我也不能帮你洗衣服，这个皮碗你拿去使吧！”（百雀

林)

(子供がお客さんにおしっこをかけたので、店主は申し訳なくて、何度も謝りました。すでにお金を崩していましたが、店主は頑として明瓦のお金をもらおうとしませんでした。そこで、ポケットから五十元札を出して、バッキンと一緒に渡して、言いました。「この子ったら、なんでお客さんにおしっこするの。洗濯してあげられないので、このバッキンを持っていってください。」)

上記の例文のように、いずれも否定文である。(9)は馬に乗るように勧められたが、怖くて乗ろうとしなかった。(10)はお客さんが商品の代金を払う前提があり、店主はどうしてももらおうとしなかったことを表す。“肯”の文は相手の提案または要求などに対して、受け入れない意志を表す。よって、“肯”も「選択意志」と言える。

このような相違から、前掲の(1)の違いが解釈できる。「眠くなったから寝たい」という場合は、単なる願望を表す“想”，“要”が用いられる。一方，“愿意”と“肯”は相手に意向を聞かれたなどの前提があり、ある程度のハードルを越える時に使うため、不自然になる。

## 第 2 節 構文的な視点から

ここでは、構文的な視点から“想”，“要”，“愿意”，“肯”を検討してみる。“想”，“要”は動詞としても助動詞をしても使われるが，“愿意”と“肯”は助動詞である。一部の文法書には“愿意”，“肯”も動詞としている。理由は，“我愿意”，“他不肯”といったように返答することができるためであるとしている。しかし、助動詞の“会”と“能”も“会”（できる），“不能”（できない）というふうに、単独で返答することができる。

また、(11)のように、動詞に付くアスペクト助詞の“着”，“了”，“过”のいずれも付くことができないことから，“愿意”，“肯”は動詞でないことが証明できる。

(11) a. \*他愿意了 / 着 / 过去北京。

b. \*他肯了 / 着 / 过去北京。

(彼は北京に行きたかった / がっている / かったことがある。)

次は副詞との組み合わせを見てみる。

(12) a. 他很 / 非常 / 特别 / 最想去北京。

b. \*他很 / 非常 / 特别 / 最要去北京。

c. 他很 / 非常 / 特别 / 最愿意去北京。

d. \*他很 / 非常 / 特别 / 最肯去北京。

(彼はとても / 非常に / 特に / 最も北京に行きたい。)

“很 / 非常 / 特别 / 最”は程度副詞である。“想”と“愿意”はこれらの副詞と共起できることから、程度性を帯びるものだと見て取れる。一方，“要”と“肯”は“很 / 非常 / 特别 / 最”と共起できないため、程度性を帯びないと分かる。

仁田（2002）では、程度性について次のように述べている。「＜程度性＞というものは、属性（質）や状態が幅・度合い・スケールを帯びて、その属性や状態として成り立っていることから生じる。言い換えれば、度合いをさらに加えようが減少させようが、また、スケールの前方に進もうが後方に後退しようが、その属性や状態であることを止めはしない。つまり、ある属性や状態には、様々なレベル・段階が存在する。属性や状態の程度性が変化することとは、属性や状態のレベル・段階が変わることである。また、定まった終端性・限界を持たないのが属性（質）や状態である。」（仁田 2002：147）

仁田（2002）の記述に照らし合わせると、“想”と“愿意”は幅・度合い・スケールを帯びており、終端性・限界を持たないため、“很／非常／特別／最”などの副詞が付くことができる。一方、“要”と“肯”は幅・度合い・スケールを帯びておらず、終端性・限界を持つものなので、これらの程度副詞と共に起することができない。

また、先行研究で“要”の否定は“不要”ではなく、“不想”であることがたびたび指摘されてきた。しかし、(13)のように子供や女性が甘える時に使える。

(13) 我不要去幼儿园。

（幼稚園に行きたくない。）

もう一つ興味深い現象が見られる。(14)のように、いずれも“不”で否定することができる。一方、完了したことの否定を表す場合は、(15)のように、“想”、“要”は“没”で否定することができるが、“愿意”と“肯”は“没”で否定することができない。

(14) a. 我不想去北京。

b. 我不要去北京。

c. 我不愿意去北京。

d. 我不肯去北京。

（北京に行きたくないです。）

(15) a. 我没想去北京。

b. 我没要去北京。

c. \*我没愿意去北京。

d. \*我没肯去北京。

（北京に行きたくなかったです。）

井上・黄（2000）では、一般的に言われている中国語の“不”と“没”の使い分けを次のように整理している。

(16) ①一般論の否定 …………… 「不」

②個別事象の否定

a. ‘状態’（静的事象）の否定 …………… 「不」

- b. ‘基準時以後の動的事象’ の否定 …………… 「不」  
 c. ‘基準時及び基準時以前の動的事象’ の否定 …………… 「没」

井上・黄 (2000 : 113)

(14), (15) の文をこの基準と照らし合わせてみると, 両者の違いを次のように解釈することができる。“愿意去北京”, “肯去北京” は状態 (静的な事象) であるため, “不” しか用いられない。一方, “想去北京”, “要去北京” は動的事象であるため, 基準時以後の出来事の場合は, (14) のように “不” を用いるが, 基準時以前のことを表すときは (15) のように “没” で否定する。

また, “想” と “要” は助動詞であるが, 動詞の性質が残っていると考えられる。

さらに, 次の (17) で分かるように, 他人の願望を表す時は, “愿意” しか用いられない。構文的に説明すると, “愿意” の後に主述構造を置くことができるが, “想”, “要”, “肯” はできない。

- (17) a. \*他不想父母离婚。  
 b. \*他不要父母离婚。  
 c. 他不愿意父母离婚。  
 d. \*他不肯父母离婚。

(彼は親が離婚してほしいです。)

つまり, “愿意” は出来事の外部で願望を表すことができるが, “想”, “要”, “肯” は出来事の内部の願望しか表せない。

先行研究では, “肯” は否定文によく現れると指摘している。(史 : 2015) 本研究で調査したデータの中で, “肯” の例文は 18 例見られた。その内, 肯定文は 4 例しかなかったが, 否定文は 13 例あり, 72% も占めている。また, 反復疑問文が 1 例あった。

肯定文の 4 例の内, 3 例は (18) のような仮定文の従属節で, 1 例は (19) のような「労力を惜しまない」といった文である。“肯” は肯定文に現れることが少ないことが分かる。

- (18) 小伙计说, “其实也没有什么, 如果有个小姐肯养活我, 我就无所谓。可惜没有。” (父亲还在渔隐街)

若い店員は「実は構わない。もし水商売の女が養ってくれるなら, 僕はべつにそれでいい。残念ながらそんな人がいない。」と言いました。

- (19) 爹就说下去: “……爹没给你留下啥, 爹只给你留了一手好活计。这就够了。是不是? 爹到啥时候都是个庄稼人, 你也啥时候都是个庄稼人。……自小我就看出来, 你是一个好孩子, 你忠厚, 你肯下力, 你孝顺, 你还是个心肠软的人。爹喜欢你, 爹信你, 爹就是再也不能帮你了, 再也不能啦! ……爹想你啊!” (春秋引)

(父が続けて言いました。「お父さんは素晴らしい腕のほかに, 何も残してあげなかった。それで



十分だろう。な。お父さんはいつまでたっても農家で、お前も農家なんだ。子供のころから分かっていたよ。お前はいい子なんだ。温厚で労力を惜しまない。親孝行で心の優しい子だね。お前が好きだ。お前を信じている。お父さんはもうこれ以上助けられない、これ以上無理だ。お前に会いたいよ。）」

史（2015）では、(19)のような文を「肯＋出力、动脑筋类动词（词组）」（“肯”＋力を出す，頭を働かすタイプの動詞（フレーズ））とし，“肯”の非典型的な用法だとしている。また，“肯”と組み合わせられる動詞（フレーズ）を以下の通り挙げている。“干、出力、卖力气、吃苦、卖命、帮助人、动脑筋、用心思、思考、钻研、下工夫、努力、学、上进等”（する，力を出す，力を尽くす，苦勞をする，命がけで働く，人助けする，知恵を絞る，頭を働かす，考える，研鑽する，尽力する，努力する，勉強する，向上心を持つなど）

このような用法は，本研究で調査したデータでも，18 例中 1 例しかなかったことから，“肯”の非典型的な用法であるという主張の根拠になると言える。データが限られているものの，仮定以外の肯定文に現れたのはこのタイプの文しかなかったことが分かる。

次は否定文を見てみる。先述したように，“肯”はほとんど否定文で用いられる。

- (20) 王琼阁叹着气说：“人家给前方的生个儿子，给你呢，养活的是丫头！小没啊，人家对你不好啊。”小没真是哭笑不得，他说生男生女又不是文秋说了算，她有什么罪过？可王琼阁认定小没是上当了，说什么也不肯来。小没无奈，求助养母，说家中总该去个人才好啊，要不太冷清了。养母叹了口气，买了几斤鸡蛋，不情愿地去了。（百雀林）

（王瓊閣がため息をついて言いました。「彼女は前の夫には男の子を生んだのに，あなたには女の子を生んだの。没さん，彼女はあなたにやさしくないの。」没さんは泣くに泣けず笑うに笑えず，男を生むか女を生むかは文秋が決めることじゃない，彼女に何の罪があるのかと言いました。しかし，王瓊閣は没さんが騙されたと思い込んでいて，来ようとしません。没さんは仕方なく，家族が誰も来ないと寂しいと養母にお願いしました。養母はため息をついて，仕方なく卵を買って行きました。）

- (21) 吃完这顿饭，他的心情好多了，两只手背在后面，独自从小路绕回了家。两亲家告诉他，葛宝珍见他没回家，中午不肯吃饭，后来就悄悄走了，有一个小时吧。（消失在布达拉宫的一头鹰）

（彼はご飯を食べて，気分がずいぶん晴れてきました。両手を後ろに回して，一人細道を帰りました。嫁の親は，葛宝珍が彼まだ帰っていないと知って，昼ご飯を食べようとせず，その後，そっと帰ってしまったから，一時間ほど経ったと言いました。）

(20) では養子に子供が生まれたので，お祝いに行くべきだが，養父は嫁が気に入らなくて，どうしても行きたくない。(21) では，葛宝珍は昼ご飯を食べる気にならず，食わずに帰ってしまった。これらの文も 3.1 で指摘した「前提に対して主体の強い意志の表れ」の解釈と一致

している。

なお、本研究で調査した“肯”が現れる 18 例の内、疑問文は 1 例しかなかった。

(22) 可是，她还肯不肯呢？

（でも，彼女はまたしたいのかな。）

### 第 3 節 日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”

この節で日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”を比較してみる。

(23) a. 北京に行きたいです。

b. 我想去北京。

c. 我要去北京。

d. 我愿意去北京。

e. 我肯去北京。

主語が一人称の場合は，日本語と中国語は対応している。

(24) a. \*彼は北京に行きたいです。

b. 彼は北京に行きたがっています。

c. 他想去北京。

三人称の場合は，中国語では一人称と同じ構文が使われるが，(24a)の「彼は北京に行きたいです」は成立せず，(24b)の「彼は北京に行きたがっています」で表す。

日本語の「タイ」と中国語のそれに当たる助動詞における人称による日本語と中国語の相違を，池上（2008）の「主観的把握」と「客観的把握」に基づいて考えてみたい。

池上（2008）では，事態把握を「主観的把握」と「客観的把握」に分類し，以下のように定義している。

＜主観的把握＞：話者が問題の事態の中に自らの身を置き，その事態の当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても，話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

＜客観的把握＞：話者が問題の事態の外に自らの身を置き，その事態の傍観者，ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても，話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し，事態の外に身を置いて，傍観者，ないし観察者として客観的に（自らの分身を含む）事態を把握する。

池上（2008：3）

池上（2008）では，日本語と英語を比較し，「主観的把握」は日本語話者好みの事態把握の仕方であるのに対して，「客観的把握」は英語話者好みの事態把握の仕方であると指摘している。

池上（2008）のこの理論を援用すれば、中国語では“他想去北京”が自然に用いられるのに対し、日本語では「彼は北京に行きたがっている」と表現するという相違点について、次のように解釈することができる。すなわち、願望、意志を表す助動詞文の成立に際しても、日本語の「主観的把握」が見られるということである。日本語では、自分の願望を表す時は「行きたい」を用いる（23a）。第三者の感情を表す時は（24a）の文は成立せず、（24b）のように「がる」などを付加する。これは自分自身の願望は主観的に捉えられるが、他人の願望は表出される様子で観察するしかないため、「がる」を付加して、客観的に捉えるより他ないからである。一方、中国語では、英語と同じように「客観的把握」が好まれ、話し手は事態の外から出来事を客観的に把握することができる。“他想去北京”が成立するのはこのような事情の違いによるものだろう。

#### 第4章 まとめ

本研究では、日本語の「タイ」と中国語の“想”，“要”，“愿意”，“肯”を比較した。まず、中国語の四つの助動詞の相違点を意味的な視点と構文的な視点から論じた。意味的な視点では、“要”は“想”より願望が強い。“愿意”と“肯”とは何か前提があり、それについて主体の願望、意志を表す。願望の対象がマイナスなものであってもよい。障害を乗り越えた主体の願望を表す。また、“愿意”も“肯”も相手の提案に承諾する・しないとといった「選択意志」を表す。

構文的な視点では、以下の違いについて検討した。①“想”と“愿意”は幅・度合い・スケールを帯びており、終端性・限界を持たないため、“很 / 非常 / 特別 / 最”などの副詞を付加することができる。一方、“要”と“肯”は幅・度合い・スケールを帯びておらず、終端性・限界を持つものなので、これらの程度副詞と共に起ることができない。②“愿意去北京”，“肯去北京”は状態（静的事象）であるため、否定に“不”しか用いられない。一方，“想去北京”，“要去北京”は動的事象であるため、基準時以後の出来事の場合は，“不”を用いるが、基準時以前のことを表すときは“没”で否定する。また，“想”と“要”は助動詞であるが、動詞の性質が残っていると考えられる。③“愿意”の後に主述構造を置くことができるが，“想”，“要”，“肯”はできない。“愿意”は出来事的外部で願望を表すことができるが，“想”，“要”，“肯”は出来事の内部の願望しか表せないためと考えられる。④本研究で調査したデータの中で，“肯”の例文は18例見られた。その内、肯定文は4例しかなかったが、否定文は13例あり、72%も占めている。また、反復疑問文が1例あった。

最後に人称における日本語の「タイ」と中国語の“想”の文を対照させた。中国語では一人称と三人称は同じ構文が使われるが、日本語では三人称の場合は「彼は北京に行きたいです」

は成立せず、「彼は北京に行きたがっています」で表す。この場合も、日本語の「主観的把握」を好む傾向が見られ、中国語では「客観的把握」が好まれるからだと説明できる。

#### <用例出典>

鮑十《春秋引》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 迟子建《百雀林》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 迟子建《一坛猪油》《2008 中国短篇小说年选》花城出版社。  
 戴来《在澡堂》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 范小青《父亲还在渔隐街》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 刘庆邦《八月十五月儿圆》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 邱华林《流浪者之家》《2008 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。  
 叶弥《消失在布达拉宫的一头鹰》《2007 中国短篇小说精选》长江文艺出版社。

#### <先行研究>

荒岡啓子（1995）「愿意想」相原茂・荒川清秀・大川完三郎・杉村博文編『中国語類義語のニュアンス』184, 185 頁, 東方書店。  
 相原茂主編（2015）『中国語類義語辞典』朝日出版社。  
 荒屋勸主編（1995）『中国語常用動詞例解辞典』日外アソシエーツ。  
 池上嘉彦（2008）「主観的把握：認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』第 3 号, 1-6 頁。  
 井上優・黄麗華（2000）「否定から見た日本語と中国語のアスペクト」『現代中国語研究』第 1 号, 113-122 頁, 朋友書店。  
 石井友美（2016）「意志表現としての“想”と“愿意”」『中国語教育』第 14 号, 57-78 頁。  
 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版。  
 王精誠・崔曉静（2009）「日本語助動詞『タイ』と中国語助動詞“想”との対訳研究」『日本言語文化研究』第 13 号, 35-50 頁。  
 王志英（2010）「中国語の“想”と“愿意”の違いについて」『日本言語文化研究』第 14 号, 33-47 頁。  
 呂叔湘主編菱沼透・牛島徳次訳（2003）『中国語文法用例辞典』東方書店。  
 劉月華著片山博美・相原茂訳（1991）『現代中国語文法総覧』くろしお出版。  
 史彤嵐（2015）「关于“肯”的语义语用特点及与“愿意”的区别」『中国語教育』第 13 号, 131-146 頁。  
 小学館・对外経済貿易大学・商務印書館（2015）『日中辞典』（第 3 版）小学館。

## A Contrastive Study of Auxiliary Verbs in Japanese and Chinese with a Focus on “-tai” in Japanese and “Xiang,” “Yao,” “Yuan Yi,” and “Ken” in Chinese

Caihong Yang\*

### Abstract

The present study seeks to analyze the semantic and syntactic differences between four types of Chinese auxiliary verbs. Semantically speaking, the verb “yao” expresses a stronger desire than “xiang.” In contrast, the verbs “yuan yi” and “ken” express the desire or volition of the subject based on a presupposition. The target of the desire can be negative in nature. The verbs “yuan yi” and “ken” express “selective will” that the subject uses to accept or reject external propositions.

The study also analyses the following syntactic differences. (1) Both “xiang” and “yuan yi” express the notion of breadth, degree, or scale, and can be used together with the adverb “hen.” On the other hand, “yao” and “ken” do not express the notion of breadth, degree, or scale, and cannot co-occur with adverbs of degree. (2) The verbs in sentences “Yuan yi qu Bei Jing” and “Ken qu Bei Jing” express states (static circumstances), and can only be negated by “bu.” The verbs in sentences “Xiang qu Bei Jing” and “Yao qu Bei Jing” express dynamic circumstances, and are negated by “mei” if the events they describe take place before the reference time. (3) A subject-predicate construction can be used after “yuan yi,” but not after “xiang,” “yao,” or “ken.” This may be attributed to the fact that “yuan yi” can be used to express a desire outside an event, whereas “xiang,” “yao”, and “ken” can only be used to express a desire inside an event. (4) In this study, 72% of the data used for the analysis of “ken” contained negative sentences.

Finally, the study examines the use of grammatical person through a contrastive analysis of Japanese sentences containing “-tai” and Chinese sentences containing “xiang.” In Japanese, there is a tendency towards “subjective construal,” whereas in Chinese, there is a tendency towards “objective construal.”

### Keywords:

Japanese-Chinese contrastive study, auxiliary verbs, -tai, xiang, yao, yuan yi, ken

---

\* Kobe Yamate University, part-time Lecturer

